
久我山顔をめぐる冒険

シャロク坊主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

久我山顔をめぐる冒険

【Nコード】

N8020T

【作者名】

シャロク坊主

【あらすじ】

京王線は好きですか？

私は好きです。時にホームを間違えてみるのも悪くないと、思い知らせてくれたのが久我山ですから。

不用意に坂を登らない。人と人とを結びつけない。呪術の基本も忘れてしまった、それが当然の報いとも申せましょうか
人の顔など、あまりじろじろ見るものではないですねえ。

吉祥寺をバイト探してぶらぶらしつつ、本屋で論文のネタでも探
すべく文芸批評のコーナーに張り付いてたのだけど、なかなか買う
ものが決まらない。漱石はおもしろいのには漱石論はいまいちおもしろくない、という現実に何年経っても馴染めない。

おもしろくない先行研究を踏まえないと勉強不足と言われるというジレンマにびくびくしつつ、佐々木敦の批評家養成ギブスなる本をパラパラめくる。「人と違った視点を提供しよう」「なるだけおもしろいものを書こう」という二つを原則にしているまっとうな本だった。巷にあふれる漱石論は似たようなことが書いてあるしおもしろくないのでだいたい失格しているな、うんうんと思った。

バイト先として目星をつけていた居酒屋に入ってみようかとも思ったのだが、テーブル席、団体客利用を声高に歌っている店なので、なんとなく一人では入りづらかった。こういう根性がよくないのだと思いつながらぼんやりパスモをチャージして改札をくぐり、くぐったのが中央線ではなくて京王線だったと気付く。

やってしまった。

後悔が身を包む。見栄の一つも張りたくなつて、店員に声をかけるのがためらわれた。ただでさえ間抜けな一日に間抜けなオチまでつけるのはよくない。

せっかくだから、日頃行かない、急行で一駅の「久我山」とやらに行ってみようじゃないか。

そうして、巷の有意義な連中に混じってぶらりと旅を試みたのである。

電車の中は空いていて、脂ぎっていなかった。この時間の上りだから、何処もこんなものである。ただ、椅子のふかふか具合が中央線に勝っている。

なんとということもなく久我山についた。電車の窓から外を見ると、

すぐく近い位置にマンションが立ち並んでいた。息が詰まる。典型的な住宅しかない駅に思えて、なんだかやる気がうせてしまった。

ともかく改札を出ると、そこにもまた本屋があった。和辻哲郎の「道元」が三冊も並んでいて、思わずパラパラ立ち読んでしまう。

禅の奥義はともかく道元の著作の批評はできるといふ前置きのあと、親鸞と対置する形でむにやむにやと何かが書かれていた。曹洞宗と浄土真宗を比較する意図についてはよくわからなかった。道元と親鸞の個人史を比較する意味においてはもっとよくわからなかった。

正法眼蔵が近所の図書館に置いてあったからとりま読んでみよう、と思いながら、商店街のありそうな、エスカレーター完備の方向に駅舎を出た。商店街、というほどのものもなく、飲み屋と飲食店が数件あるだけだった。ただ、魅力的な確度の坂道があった。

坂道萌えの概念を説明するには「耳をすませば」のワンシーンを思い浮かべてくださいと言っただけで事足りる。おわかりだろうか？ その手の住宅地ならではの、魅力的な坂があったのだ。

この坂だけは登らなければならない。そう思ってひたすら登って行った。それほどの勾配ではなかったので、すぐに平らになった。街灯の先、道は暗闇に続いている。比較的大きめの一軒家が整然と立ち並んでいる。どの家も趣向に飛んでいて見ていておもしろいが、所狭しとせまつくろしく並んでいるせいで、素直に感心できなくなる。ここにはまともな庭がない。余分なスペースを削ったら、家一軒というエゴが残った、という体である。進めば進むほど息苦しくなっていく。

私には、東京で新たな街を見るたび、関西で例えるならどんな街だろう、と考える癖がある。せまつくろしい灘。団地のない南千里？ それとも、生垣のない吹田の山の手……。どうもしっくりこない中で、ふと見上げた看板に「西宮中学」と書かれていた。

「なるほど、西宮か」

と思ったが、私は西宮にきちんと足を踏み入れたことがなかった。でも、なんとなくしっくりくる。久我山＝西宮で頭の中に

ワームホールが広がり、空間の空白が埋められていく。

やがて道は途切れ、Y字路に、この先、小学校、図書館、中学校などと書かれた看板が立っていた。坂を登った先には学校がありました。まさにハルヒ、西宮の面目躍如だ。大変結構。問題は、私もはや学生ではなく一介の不審者に過ぎないということだ。

背後では女性の二人連れが歩いている。怪しまれないようにしきりに首をかしげて携帯を確認し、「あれれーグーグルマップ役に立たないぞお」という身ぶりをしながら元来た坂を下っていく。

みじめである。

頭がおかしい。

あんまりみじめだったのでツイッターに「冒険なう」と書いて自分を誤魔化す。電車に乗って、早く帰ろう。なにが非日常だ。何が旅だ。世界は人間なしに始まって、人間なしに終わるのだ。そもそもまともに日常も構築できない奴に旅をする資格があるものか。去れ久我山を！ 我こそ既に道程なり！

などと自分に命令しながらエスカレーターを昇る。すれ違う人の容姿が、たまたま似ている。やせ形で細いメガネをかけたひよる長い女子高生、大学生、塾帰りの中学生？ なんてみんな似たようなガリ勉オーラを発しているのだろう。

もしか、あの有名な「インスマス顔」ならぬ、「久我山顔」が存在するのか？

久我山は既にクトゥールに乗っ取られているのか？ 否、山だから、なんかもつと山つばい邪神に乗っ取られているに違いない。

改札をくぐり、階段を群れを成して登ってくる人の流れをやり過ぎていると、やはり「久我山顔」の人間が多いことに気付く。

すごい、一人も肥満体形の人間がいない。五十人からして一人もだ。脂肌のおっさんすら一人もないなんて、脂ぎった中央線では考えられない。

どういう……ことだ……？

まさか、本当に、ここには使徒が住んでいるのか？ 人間の脂を奪う、使徒が……。

などと考えながら電車に乗って。

「次は「永福町」」というアナウンスを聞いて、愕然としてしまった。

吉祥寺と反対方向である。

何故だ、神よ。繰り返せというのか、この無意味な旅を。

余りの頭の悪さに「冒険でしょでしょ「ナウナウ」」とツイートして誤魔化すしかなかった。

誤魔化しきれなかった。永福町を探検する気力など既がない。電車賃が余りにも勿体無い。

暇で仕方がなかったので、ホームズごっこ（人間観察）をすることにした。やはり、誰も太っていない。向かいには線の細い文化系男子が三人並んで腰を下ろしている。機嫌よさそうにひよろひよろしている。もはやその姿は人間ではなく、悪魔だった。ポーズがなんとなく、ピグモンに似ていた。

「永福町ー永福町ー」

私は一目散に電車を降りて、反対側のホームに向かった。フェンスの向こうから、シャッターの閉まった中華飯店の残り香が香ってきた。

ホームには私以外、ひとつこ一人いなかった。一人もだ。乾いた笑いが出る。人影を求めてさまよい歩くと、先頭車両の乗り場付近に、素足にヒールを履いて、頭にバンダナを巻いた女性が立っていた。

そのバンダナが、どうにも「紺色の腹巻」にしか見えない。

素足にヒール、だらりとしたグレーのズボン、もつとだらりとした鷲色のカーディガン、バッグには鈍く銀色に光るウィンドブレイカーらしきものが詰め込まれている。

人外である。

ベンチに座り、向かい側のホームを見つめながら思考停止していると、左にぼつちやりと太ったスーツのズボンにワイシャツ姿のメガネ男を見つける。見事な布袋っ腹であり、永福町の名にふさわしく思える。なるほど、村上春樹の言うところの「気持ちよい太り方」とはこれのことかと思う。

ところが、右にこれまたスーツのズボンにワイシャツ姿のメガネ男子が立っている。彼はふとっちはいない。が、しめっていた。ワイシャツの下には何も来ていなかった。いい身体だ。まるで衣服が透き通ったと神話に残る「衣通姫」のようだ。

なんだこれは。

一転して、ホームが天地創造の魔境と化した。

二人の　左と右の間には、ボーター柄のシャツを着た、ごく一般的な大学生が携帯をいじっていた。なるほど、と私は思った。二項対立だ。太るか、（露出趣味の）マッチョになるか。これが旅のだいご味であり、構造主義の本意であり、何かと何かを比較する意義であり、批評によって物語を発掘するということなのだ。

おもしろい。俺のきちがい沙汰にも意味があったというわけだ。今はせめてこの旅を、活字にまとめる用意をしよう。

だが、果たしてこの話、ここで終わっていいのか？

なんだか、オチが、弱くないか？

悪寒がした。ふと隣を見ると、鉢巻きのようにハラマキを絞めていた女が消え失せていた。

彼女は、向かいのホームの大学生のすぐ後ろに、いた。いつ移動したのかも、わからなかった。

おかしい。まさか、あの女、

「ホームを間違えたとも言ったのか？」

「違うよ」と。彼女は言った。

左の布袋と右の衣通姫と真ん中の大学生とその背後にいるハラマキ女が、一斉に僕を見ていた。
「間違えているのは、君だけだ」

下りの京王線は、酒と脂の雰囲気に包まれていた。女子高生の短いスカートと、頬を赤らめたように見える未熟な化粧が、不穏な色気まで醸し出していた。そこには、日常があつた。誰も頭にハラマキなんぞ巻いてやしない。

吉祥寺で中央線に乗り換えて、私は、いつしか自分が東京行きの上り電車に乗りたがっていることに気が付いた。

わざと間違つて、あの人外たちの傍に行きたいと、そう思っていることに気が付いた。

私の魂は、強く反対のホームを求めている。

私の理性は、ただ、怯えているにすぎない。

夜の上り電車は、毎日各路線から通常通り営業している。

各地から集まった人外たちは、おそらく渋谷あたりで合流して、百鬼夜行を行脚する。その中には、ピグモンのような仕草をした「久我山顔」の三人も、永福町の四人も混ざっているに違いない。

なんて楽しげなだろう。

嗅ぎなれた中央線の脂を吸い込みながら、私は、自分もいずれあなる／ああはなれないと、妥協混じりに呟くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8020t/>

久我山顔をめぐる冒険

2011年6月4日04時10分発行